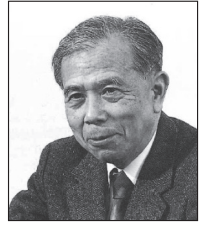


故佐々波秀彦先生の思い出

東京工業大学特任教授

梶 秀樹



佐々波秀彦先生は、平成24年9月12日早朝、肺炎のため関東中央病院でお亡くなりになりました。享年89歳でした。謹んでご冥福をお祈り申し上げるとともに、ここにまた都市計画を学問領域として確立するために努力された草分けの一人を亡くしたことを深く悲しむものです。

佐々波先生の功績は数限りなくありますが、昭和40年に大学院に入ってから都市計画を学び始めた私にとっては、当時、ロンドン州議会の「新都市の計画」(1964)や、F.スチュアート・チャピン・Jr.の「都市の土地利用計画」(1966)など、都市計画の教科書など全くない時代の、バイブルとも言えるような本を立て続けに翻訳刊行されていた先生は、まさに雲の上のような存在でした。

その佐々波先生に実際にお会いしたのは、それから7年後、博士課程を終えて大学の助手から、先生のおられた建設省建築研究所の研究員としての採用面接のために、新宿百人町の研究所の先生の部屋に伺った時でした。常々畏敬していた方に初めてお会いするこちらの緊張など全く頓着する様子もなく、いかにも嬉しそうに満面に笑みをたたえて、出迎えてくださった先生のお顔は今でも忘れません。

私が建築研究所に入った昭和47年当時は、佐々波先生は第1研究部の都市計画研究室長で、私と黒川沈氏(現計量計画研究所所長)が、直属の室員でした。その時、都市計画の分野で大きな話題となっていたのが、故河角広博士が、昭和39年に国会の地震対策委員会で提唱された「南関東大地震69年周期説」で予想される東京の地震と大火に対し、年月の掛かる都市不燃化対策とは別に応急対応的な避難場所の整備を急ぐことでした。白鬚東地区防災拠点再開発計画が都市計画決定されたのもこの年でした。

しかし、こうした避難場所の指定によって、本当に都民の安全を守ることができるかを検証することが必要であるとの考えから、佐々波先生は、火災の拡大と避難の相互関係を総合的に研究するために、科学技術庁に「特別研究促進調整費」をつけるよう強く働きかけ、それが採択されて、昭和48年から3カ年計画の総合防災研究がスタートしました。佐々波先生が従来の開発型都市計画を超えて、その後防災都市計画まで含めた数々の貢献をされてゆくきっかけとなったプロジェクトでした。

昭和48年4月、建築研究所は第1研究部にあった都市関係4室を分離して第6研究部を発足させ、佐々波先生はその初代部長に就任されました。この新組織設立もまた、都市計画という学問分野を社会的に確立したいという先生の悲願でした。

昭和52年に佐々波先生は筑波大学教授に転任され、後進の指導という新たな任務に着かれました。バンコックのアジア工科大学院に赴任していた私に、先生から任期が終わったら筑波大学へ来ないかというお誘

いがあり、帰国後筑波大学に着任したのですが、ほぼ入れ違いに、先生は名古屋の国際連合地域開発センター(UNCRD)に所長として転身されてしまったため、大学で御一緒に仕事をすることはできませんでした。

UNCRDに移られた先生は、開発途上国では性急な開発が災害の危険を助長しており、災害の被害を増幅してさらに開発が遅れるという悪循環に陥っているため、それを断ち切るためには地域開発過程の中に防災計画を統合することが不可欠だとして、UNCRDの中に「地域防災ユニット」という調査研究部門を立ち上げられました。折から国際連合の総会では、中曽根康弘首相による「国際防災の10年」の運動の提案が、ほぼ満場一致で採択されました。1988年のことでした。

1993年、70歳になられた先生は、国連の規定で所長を退任され、私が後任として引き継ぐことになりましたが、予想以上の激務と複雑な国連の人間関係を翻弄され、先生の適切なアドバイスがなければとても勤まる職務ではなかったと改めて感じます。

私は今日までの人生を、まさしく先生に強く先導されながら歩んできました。先生は、いわゆる大学での教え子といわれる方がいませんでしたが、若い研究者を実務家に育てることに人一倍熱心でした。その中でも私は建築研究所に入所した時から、先生に特に心にかけていただいた一人だったと思います。

「梶君、僕の打率は3割だね」というのは、多くのプロジェクトを提案し、旨いく時もあれば没になることもあり、でも直ぐにまた次の新しいアイデアの実現に取り組んでいく先生の口癖でした。しかしその3割は、素晴らしい実績の3割であったといえます。建築研究所国際地震工學部の創設、第6研究部の設立、そして国際連合地域開発センター(UNCRD)の誘致と所長としての活躍等、枚挙に暇がありません。そうした功績に対し、先生は、都市計画学会の石川賞、国際交流賞、国土庁長官の防災功労者賞等を受賞されていますが、それらの表彰ではとても尽くされるものではありません。

亡くなられる4カ月前の5月、自宅での療養が難しくなったので二子玉川の介護付き老人ホームに入られたと伺ったので訪ねたところ、大変元気で、いつもどおりの満面の笑顔で迎えてくださいました。そして、「梶君、UNCRDの40周年記念事業をやってはどうかと思うので手伝ってくれよ」との相談を受けました。最後まで闊達な仕掛け人でした。

(写真は「CITE LETTERE」vol.13,1995.4より転載)

故・佐々波秀彦先生を想う

ペルー国立工科大学名誉教授 日本都市計画学会名誉会員
棚橋一郎

佐々波秀彦先生は、昭和22年に大学を卒業し、旧・建設省住宅局に奉じて米国に留学後に、建設省とユネスコの共同事業として行う、国際地震工学研修の準備に当たり、昭和37年に旧・建設省建築研究所（建研）に創設された「国際地震工学部」の初代の管理室長となりました。

これが先生の国際活動の始まりとなりましたが、その研修は今日まで50年間順調に進められ、日本の行う国際研修事業の中でも最も高く評価されております。

佐々波先生は2年後に研究部に移ってから、国連地域開発センター（UNCRD）の設立に貢献し、また成長期にあった当学会の運営に力を入れ、国際委員長などを務めました。

一方、先生の研究活動は当時、住宅と都市計画の研究を行う第1研究部に新たに設けられた都市施設研究室の室長として始まり、その後、先生のご尽力で、都市計画部門が独立して第6研究部となり初代の部長を務められました。この間、私は佐々波先生の直属の部下として11年間、親しくご指導を頂きました。そして第6研究部長を受け継ぎました。

この間に佐々波先生は、ご自身のテーマである「大都市圏計画」に関する研究などを行いながら、度々海外に出向き、国の唯一の研究機関の役割である、諸外国の都市計画に関する最新の情報を収集・提供することに力を入れ、多くの著書を出版され、また視察や留学先の相談にも快く応じました。

また、先生は都市防災計画の研究に力を入れ、建設省・総合技術開発プロジェクト「都市防火対策手法の開発」を企画・推進され、それは高山栄華先生を委員長とするオールジャパンの委員会の下で行われ、大きな成果を納め、高い評価を得ました。そしてこのプロジェクトを通じて、多くの都市防災計画の専門家が育ちました。

一方、国際派の弟子も育てられ、私もその一人として、ペルーへの地震防災技術協力をライフワークとする事になりました。

こうして、次々に新しい組織づくりを行い、国際協力や研究の場を広げましたが、その先生のスピリットの根源はどこにあるかを振り返って見ますと、先生との会話を思い起こす中で、二高時代に「社会のために何をなすべきか」、「どう生きるべきか」を探り、新渡戸稲造に多くを学んだ事に気が付きました。

新渡戸稲造は「太平洋の懸け橋たらん」と米国ボルチモアのジョージ・ホプキンス大学で農政学などを学び、世界の平和と平等を願い、自らは簡素に誠実に生きる事をモットーとするクエーカー教徒となりました。そして後年、国際連盟の事務局次長となり、東西文化の交流と平和のために貢献しました。

佐々波先生は建設省に奉じた後、新渡戸稲造を追うかの如くに渡米し、建築学の先端を行くペンシルベニア大学に学び、「都市計画・地域計画」を志し、クエーカー教徒となりました。そしてその後、その分野で国連などの国際機関を通じて、国際交流に大きく貢献しました。建研時代はまさにそれへの第一幕であったと言えます。

私は日本の近代都市計画のパイオニアと言われる石川栄耀先生の最後の弟子の一人として、先生の足跡を追っていますが、先生も同じ二高・東京帝大コースを歩み、盛岡の出身である新渡戸稲造の「郷土論」に学び、そして国際的な視野を持ち、次々に組織を創設し、また良く読み良く書く事など、佐々波先生との共通点が多い事に驚いています。

お二人の人間像を探るにつけ、旧制高等学校における、先人に学びながら人生設計をじっくり考える教育の良さを感じます。ご冥福を心よりお祈り致します。

佐々波秀彦先生の経歴と主な業績

●経歴と業績	専攻)の創設に尽力	●日本都市計画学会における活動
1947年 東京大学第二工学部建築学科卒業	1982年 国際連合地域開発センター（UNCRD）所長に就任	1973～83年：常務理事、1971～1973年：編集委員長、1977～75年：常務理事、1977～80年：学術委員長、1981～84年：国際委員長
戦災復興院建築局（後の建設省住宅局）に任官	1984年 UNCRD地域開発環境マネージメント・プロジェクトを開始	●主な著作
1953年 米国ペンシルベニア大学にて1年間留学の後、英、仏、独の大学へ留学	1989年 国連横浜会議「国際防災の十年の挑戦」のセッションを分担	「新都市の計画」ロンドン州議会編集、佐々波秀彦・長峯晴夫訳（1964年）、「オランダの総合開発計画」佐々波秀彦・尾上久雄編（1966年）、「都市の土地利用計画」F. スチュアート・チュビン・Jr. 著、佐々波秀彦・三輪雅久訳（1966年）、「都市の住宅問題」佐々波秀彦・荻原敬訳（1975年）、「震災復興の政策科学」監修・共著（有斐閣刊、1999年）、「21世紀の街造り」（建築研究振興協会刊、2012年）
1957年 国際連合ECAFEに派遣	1991年 UNCRDアフリカ事務所（ケニア、ナイロビ）を開設	●受賞
1961年 UNESCOと日本政府の連携による国際地震工学部設置に尽力	1993年 UNCRD所長を退任、立命館大学客員教授、同・国際環境開発研究センター所長就任	1981年：日本都市計画学会・石川賞（一連の国際的活動に対して）
1962年 建設省建築研究所に出向、国際地震工学部初代管理室長に就任	1998年 芦屋市「震災復興計画委員会」委員長に就任	2008年：EAROPH 50th Golden Jubilee Award
1964年 同研究所第一研究部都市施設研究室長、以後、都市計画研究室長、第一研究部長を歴任	1999年 日本建築学会トルココジャエリ地震調査団団長	註）「佐々波秀彦さんの思い出を語る会」事務局作成（2012年11月）
1971年 国際連合地域開発センター（UNCRD）設立に貢献	2007年 ユネスコ「建築・住宅地震防災国際プラットフォーム（IPRED）」創設に尽力	
1974年 建設省建築研究所、第六研究部（都市計画）の創設に貢献し、初代研究部長に就任	2008年 EAROPH世界大会（兵庫県で開催）顧問	
建設省総合技術開発プロジェクト「都市防火対策手法の開発」などを推進	2011年 国際建築家連合（UIA）東京大会学術委員：「UIA2011東京大会学生コンペ」に参画	
1977年 筑波大学教授に就任、社会学類（都市計画		